

## 入賞

## 世界のFUKUSHIMAになる方法

学校法人関西学院関西学院千里国際高等部2年 <sup>マツバラ</sup> <sup>リノ</sup> 松原 理乃

2011年、東日本大震災による原子力災害を経験した福島は、被災直後から「がんばろうふくしま!」というスローガンを掲げ、復興への道のりをスタートさせた。私は今年の夏休みに、関西学院大学のPBL授業「福島で学ぶ復興と原発問題」の講座を高大連携生として受講し、福島の現状やエネルギー問題を学んだ。福島県庁や東京電力の職員の方などにお話を聞く中で、「福島でも10年の時間が流れている。復興はすでに終わった歴史ではなく、現在進行形、途上で続いている」という言葉が印象に残った。福島はゼロになったからイチからやり直そう、としている方々をみて、今まで自分は被災した人間ではないのでどこか人ごとだと思っていたが、自分のこととして関心を持って真剣に取り組んでいかなければいけないと気付かされた。

震災の翌年、スローガンは「ふくしまからはじめよう。」に変更された。“震災からの復興”という先の見えない戦いとは裏腹に、とても前向きなスローガンだ。そして、震災から10年の節目の年に「ひとつ、ひとつ、実現するふくしま」が策定された。「はじめよう」から「かなえる」へ。福島は10年で新たなステージに進んだといえるのではないだろうか。

なにを「はじめ」て、「かなえる」のか。福島が抱える、一番大きいであろう課題は第一原発の廃炉だ。廃炉には遠隔除染技術が不可欠だが、現状、震災前の安全神話時代の影響からか日本の廃炉部門のロボット技術は乏しい。これは危機的状況といえるだろう。ドイツやフランスといった原発大国には1970～80年代から緊急時のロボット等を予め整備しておいて運営する組織があった。福島第一原発の廃炉は今、世界の技術に助けをもらいながら試行錯誤やっている。私は、今福島がすべきことは廃炉および原子力技術の研究開発だと考える。廃炉、原子力の開発の拠点となれる場所は日本、世界に福島しかないだろう。それらの技術は福島の廃炉に間に合わなくて

も良い。今世界には運転中のものだけでも約450基の原発があって、いずれ全て廃炉しなくてはならない。そのとき、福島で生み出した技術で世界を助け、技術的なリードを取ることができたら、大きなビジネスになって、福島、日本の私たちは技術を誇りに思い、国内外からリスペクトされる国になるだろう。

地上では、脱炭素社会に向け、エネルギーのための核使用はしばらく続くと考えられており、モジュール炉や高速炉などの新しい原子力技術の登場や、核融合発電の実現も近いうちにくるだろう。また、宇宙開発において、外惑星軌道外は太陽光が弱いことや、地球を出るには莫大なエネルギーを要すること、宇宙空間では放射線を問題視する必要がないことなどから、原子力は必要とされる技術であり、開発をしておけば日本が世界をリードできる日がくるだろう。そのために、福島を世界の原子力技術の英知を結集させる地にし、研究大学といった機関をつくり、せっかく創設したロボットテストフィールドをもっと活用していきたい。そのためには国の積極的で惜しみない投資が不可欠である。そして、日本の、失敗を許さず、失敗したら叩いて、メディアは監視するといった空気は、福島の挑戦にとって邪魔になるので、明るい未来と夢を信じて見守らないといけない。

世界のFUKUSHIMAにする為に、今謳うべきなのは“知”であると考え。 “知”で必ず福島はプラスになる。日本は今、福島で、廃炉、原子力技術の現状に強い危機感を持って研究開発をはじめ、強い意思を持って取り組み、技術で世界をリードし、尊敬され、それを産業にする未来がかなってほしい。

## 参考文献

川妻伸二(2014年)「独仏における原子力緊急時ロボット」日本ロボット学会誌 Vol.32 No.1, p25-31  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jrsj/32/1/32\\_32\\_25/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jrsj/32/1/32_32_25/_pdf) (2021/09/27)